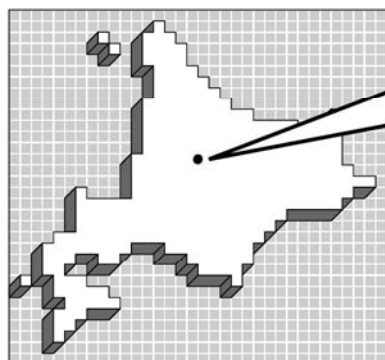


連載 わがマチの自慢 No.10



比布町

— やすらぎと
夢があふれる
ふるさとをめざして —



村上山公園から望む比布町

比布町は上川盆地の北東に位置し、東南に雄大な大雪山連邦の山々がそびえる、自然に恵まれたマチである。旭川市との境界にあるカタクリの群生で知られる突哨山とつしやうざんや東北側の北嶺山ほくれいざんなど総面積のおよそ半分が山林であるが、市街地を中心に平坦な地形がまとまっている。大雪山系を源とする石狩川が東南部を流れ、一帯は地味が豊かで水田が広がっており、内陸性の気候とも相まって、良質米の生産に適した地域である。

平成六年には道立上川農業試験場(当時)がこの地に移転。北海道が誇る良食味米「ゆめぴりか」はここで開発されており、比布町は「ゆめぴりか」のふるさとでもある。



冬のスキー場【比布町提供】



遊湯びつぷの全景【比布町提供】



「グリーンパークびつぷ」パークゴルフ場【比布町提供】

1. スキーと いちごのまち

旭川市から北へ向かう国道四〇号線で比布町に入ると「スキーといちごのまち」の看板が目を引く。古くからスキー場といちご狩りを観光の目玉として、旭川や札幌、北見方面からの利用客の誘致と

マチのPRに取り組んできて
いる。

(1) スキー場とその周辺

びつぷスキー場は、市町村営のスキー場としては道内有数の規模を誇るスキー場である。

子供から大人まで幅広い世代が楽しめるスキー場として

親しまれ、平成五年には、リフト輸送人員で一九〇万人と二〇〇万人に迫るまでになった。スキー場の山頂につながる散策路や展望台も整備されており、パラグライダーの滑空場として利用されるなど、夏場にも多くの人が訪れている。

平成一一年には、スキー場に隣接して温泉宿泊施設「良

佳プラザ・遊湯びつぷ」を、翌年には、パークゴルフ場を中心とする「グリーンパークびつぷ」をオープン、年間を通じた観光ゾーン「びつぷ良佳村」として歩みはじめた。

しかしながら、レジャーの多様化によりスキー離れが進み、周辺の市町村にも同様の施設が整備されるなどして来客者数が減少、メインのスキー場ではピーク時の四割程度になっている。

一方で、スキー場をはじめとした施設は町民の貴重な雇用の場でもある。平成二七年一〇月に町が策定した「比布町まち・ひと・しごと創生総合戦略」において、町内での雇用の場を確保するため、スキー場のリフト券利用者数や遊湯びつぷ来館者数を重要業績評価指標としており、人口減少が進む中、一定の利用者

数確保を目標に具体的な施策
を実行していくこととしてい
る。

スキー場では昨年北海道
シーズンネット[※]に加盟した
ほか、ファミリー層を主要な
ターゲットとして、親子での
利用に有利なリフト券を販売
するなど、集客の向上につと
めている。また、今シーズン
オープン前には、センターハ
ウスを新築して、利用者の利
便性を向上する考えである。

(注) 北海道シーズンネット…
加盟スキー場のいずれかで
シーズン券を購入すると、加
入している他のスキー場リフ
ト券を特別料金で購入できる。

(2) いちご狩り

いちご狩りは毎年六月下旬
から七月上旬にかけて開園さ
れており、多くの来園者で賑

わつ初夏の風物詩ともなっ
ている。しかしながら、栽培農
家の高齢化が進み、手間のか
かるいちご栽培が敬遠された
結果、ピーク時には五〇戸以
上あった栽培農家が二〇戸を
切る状況になっている。かつ
ては二〇戸以上あったいちご
狩り農園も今シーズンは八戸
となり、まち全体のいちごの
販売額もピー

ク時の約五分
の一になった。
こうした状況
に町は危機感
を抱き、いち
ご栽培を維持
しようと、い
ちご苗購入費
の支援や、今
後のいちご狩
りのあり方に
ついての検討
に取り組み始



泥んこバレー【比布町提供】

めている。
比布町の農業者の高齢化は
全道平均を上回って進んでい
る。コメやいちごなどの農業
生産を維持していくためには、
後継者や農外からの新規就農
者の確保が最大の課題である。

(3) 泥んこだらけの バレー大会

休耕田を活
用して町内外
の多世代交流
の場を提供し、
スキーといち
ごのまち比布
町を広くPR
することを目
的として七月
中旬に開催さ
れている大会
であり、今年
で八回目とな

る。昨年から四五チームの出
場者を募集しているが、それ
を超える応募があり、先着順
の受け付けとなる。町外から
は、友好交流提携都市の滋賀
県湖南市からの参加のほか、
道内では根室管内からの参加
もあり、参加者や観客など延
べ七〇〇人に達する一大イベ
ントに成長してきた。

水田という条件だからこそ
飛び出す、好プレーや珍プ
レーに観客からは大きな声援
や拍手が寄せられ、笑いに満
ちた大会となる。主催者の実
行委員会は、世代間や町内外
の交流に止まらず、比布町の
魅力を発信できる大会として
さらなる発展をめざしている。

2. マチの顔 比布 駅がリニューアル

宗谷本線比布駅は、明治三一年、比布原野の開拓からわずか三年後に開業、鉄道とともに発展してきた市街地の盛衰を見守ってきたマチの顔である。昭和五〇年代半ばに、駅構内を舞台にした磁気ばんそうこのテレビコマーションがテレビ放映され、全国的に話題となったことで知られる。

国鉄の合理化対策で昭和五九年に無人駅化したのが、町内の方が乗車券販売の委託を受け、営業を続けていた。事務室を改造した喫茶コーナーも好評だった。平成二年にはこげ茶色だった外壁を特産のいちごをイメージしたピンク色に塗装し比布らしさを加える

など、多くの人に愛されてきたが、平成二二年以降は完全な無人駅となっていた。

こうした中で、JR北海道からは、建物の老朽化に伴い、これまでの駅よりも大幅にコ



比布駅での特産品PR 【比布町提供】



比布駅スタンプ
【比布町提供】

ンパクトにした駅舎の建て替え計画が示された。町は比布駅が担ってきた役割や町民の駅に対する想い、また、駅前の商店街がシャッター通り化している状況を踏まえて、新たなマチの顔として新築することにした。

今年三月から待合室の利用が始まり、四月からは喫茶コーナーも開業。町内の観光や農産品のPRなど、町民の新たな交流や町内外への情報発信の場として、中心市街地に人の新たな流れをつくるマチの顔として生まれ変わっている。

3. 「たまごかけご はんセット」の誕生

今年の春に商工会の青年部が中心になって開発した特産品が好評だとのこと。

地元養鶏場のブランド卵「かつばの健卵」、地元稲作農家が栽培した「ゆめぴりか」、地元の特産農産物で、二年かけて育て上げられた小ねぎ「旬の彩り。」を使った「びっふ小ねぎ醤油」をセットにした「北海道比布町のとっておき濃厚たまごかけごはんセット」だ。たまごかけごはんセットは全国にも数あるが、ここまで地元産にこだわったセットは全国的にも珍しいとのこと。

このセットの開発には、町教育委員会が主催した「まちづくりリーダー育成プロジェクト事業」が大きな役割を果たした。自分たちのまちは、自分たちでつくるという意識を高め、将来まちづくりの主役として活躍する人材の育成を目的とした事業である。

このプロジェクトに集まっ



TKGセット【比布町提供】

た飲食店や農業の経営者など商工会青年部のメンバーは、旭川大学の先生を招き企業戦略や市場開拓、経営理念などの勉強会を重ねたり、マチの産業の状況や人口の見通しなどを自ら調べ、分析した。こうした勉強会を経て、メンバーはマチにはこれといった特産品がない、マチを代表する農産物を使って新たな特産

品づくりにチャレンジしようとして動き出し、三年をかけて完成したのである。

開発に当たってメンバーは、素材のままが一番おいしいと感じる農産物が多い中で、今ある商品を組み合わせ、新たな価値を生み出す商品をつくる方法もあることを学び、素材の特徴を活かした組み合わせとして「たまごかけごはんセット」に行きついたとのこと。

一番の課題となった醤油については、旭川市にある醤油メーカーに相談し、地元の農産物を使った醤油を開発しようとして試作を繰り返した結果、最終的に「旬の彩り。」を混ぜ込んだ醤油「ぴっぴぶ小ねぎ醤油」が昨年完成した。

また、販売に当たっても、消費者にこの商品の特徴が伝

わるようなネーミングにこだわり、キャラクターも、町内の小中学生から募集し、選ばれた作品を基にデザインした。こうして今春販売されたたまごかけごはんセットは一カ月ほどで五〇〇セットを売り切ることができたという。これからも町民全体で応援し育てていくことが必要だ。

比布町ではこれまで日本酒やワイン、まんじゅうなど数々の特産品を作ってきたが、やがて消えていった。役場が主導して開発したものの、町民には定着しなかったのだ。たとえ時間がかかっても、こうした町民の手による商品開発の動きが広がり、マチに根付く特産品となる。特産品づくりに向けた新たな動きとして注目される。

4. 夢をかなえるプロジェクト

比布町には子供たちの夢をかなえるプロジェクトがある。中学生を対象に行っている「君の夢プロジェクト」だ。心の豊かさを育むため、生徒が夢や希望を膨らませ、将来の生き方や進路を選択する能力を育成することをめざしている。

生徒たちは、実業団のトップ選手やプロの演奏家から直接部活動の指導を受けたり、プロ野球の試合を観戦したり、また、スキージャンプ界のレジェンド葛西紀明選手の講演を聞いたりしている。こうした機会を通じて一流選手の迫力に圧倒されたり、基本的な技術を確認したり、基礎的な練習の大切さを学んでいる。

近年は、首都圏への修学旅行を行い、自分たちで決めた研修先などを見学し、これまで触れる機会のなかった歴史や文化・芸術などを体感している。

小さなマチに住みながらも得られる貴重な体験。生徒たちはこうした機会を提供してくれたふるさとを誇りに思うとともに、夢に向かってチャレンジしていくことの大切さを学んでいるに違いない。

5. 動画でマチの魅力

比布町は豊かな自然があり、子育てに対する支援も充実している。スキー場やいちご狩りなどの観光資源もあるのに、近隣の市町村に比べ、情報発信が弱いのではないかという指摘が町民からも寄せられて

いた。そうした反省から、町では、マチをPRする動画「ぴっぴなんだもん！」を作成し、平成二十七年四月から町のホームページやYouTube、フェイスブックに配信している。この動画が好評とのこと。

この番組では、地元飲食店の定番料理を紹介する「ぴっぴのグルメ」と番組の終盤にまちをPRする「課長シリーズ」からなる。「ぴっぴのグルメ」は、料理ばかりではなく、比布の街並みや自然などさりげないマチの日常も紹介している。また、取材の対象となった飲食店の関係者や町民も出演し、マチのPRに役買っている。

この番組の作成には、役場の職員が大きく関わっており、飲食店への交渉からシナリオの作成、番組の主役までを

担っている。この動画は、マチの魅力を町内外に広く発信しているほか、何より、町民自身があらためてマチの良さに気づき、誇りを取り戻す機会を提供しているのではないかと思う。



動画撮影の様子【比布町提供】

〈取材後記〉

役場での取材を終え、比布駅のピピカフェへ立ち寄った。動画「ぴっぴなんだもん！」

にも紹介されている地元の米粉を使ったハニートーストを食べっていると、一両編成の列車が到着した。駅舎は新しくなったが、構内は従来のままだ。

駅前の商店街を歩いてみた。古くて傷んでいる建物や閉ざされた商店が並んでいるのを見ると、この町のおかれている厳しい状況を感じざるを得ない。とはいえ、旭川市とのほどよい距離、豊かな自然や静かな環境、美しく広がる水田、そして取材で伺った奮闘する青年たち、このマチは確かに素晴らしい魅力を持っている。

（比布町には、資料や写真の提供、原稿の監修など多くの協力をいただきました。）

一般社団法人 北海道地域農業研究所

特別研究員 三津橋 真一